

登場人物に迫る活動を仕組む

——『大鏡』の学習における試み——

世 良 馨 子

一、はじめに

七年前、当校に赴任してすぐに中学校一年生を担当することになった。もちろん、クラス担任でもあり教科担任でもある。それまで高等学校に勤務していたので、何もかも初めてのことであり、とまどうことばかりであった。授業にしても、何がどのように分からないものなのかがさっぱりつかめない。小学校を卒業したばかりの生徒たちを前に、何をどうしてよいか分からず、手探りでやっていた。

無我夢中で過ごした一年が終わり、大きく変化するであろう中学二年生という時期を迎えて、引き続き彼らを担任していた私は、授業をどうすればよいか悩んだ。彼らの成長のかたとして必要なことは何だろう。彼らが欲することはどんなことなのだろうか。そんなときあの忌まわしい事件が起こった。神戸連続児童殺傷事件であるあの犯行声明が公表されたとき、書いた人物は中学生（または、中学生から成長しきれていない人物）ではないかと感じた先生は少な

くないだろう。感じた通り、犯人は中学二年生であった。彼と同じ年代の生徒たちの担任であった私の悩みは、いっそう深くなった。日々の授業の根幹に据えるべき私自身のテーマの必要性を感じ、探っていた。

そのようなとき教科書（教育出版 中学国語2）に『ピーターラビットとナショナルトラスト』と『愛のおもちゃ図書館』を見た。私はこれらの文章を、「人」が力を出し合って「社会」をつくっているのだという当たり前のことを実感し考えるようにとりあげたいと思った。超人的な何かではなく、ふつうの人間の力の大事さを生徒とともに考えたいと思った。これら二つの文章に加えて『砂漠を緑に』という本から抜粋した文章を読み、まとめとして「市井の偉人を探そう」という文集を作った。この、「市井の偉人」というテーマは、生徒にたいへん気に入られた。結果的には偉人伝を読んでのレポートとなった生徒も多かったが、自分の親や祖父母、当時の当校の副校長などという、身近な人にインタビューをして、レポートをまとめた生徒も少なからずいた。

この、「人」にこだわることは、彼らが高校生になって主に古典

を担当するようになったが、卒業するまで私の中で大切なテーマとなつた。このことは、「全文を口語訳しなくても、内容理解が進んでいくことに驚いた。」「生徒として授業を受けてしまったが、古典がおもしろいと初めて思った。」という、当校にやつてくる教育実習生の授業観察後の記述に見られるように、ともすれば、文法学習と口語訳をするだけの、無味乾燥な学習に受け取られやすい古典の授業で、私を支えてくれた。古典に登場する人物や作者をただ文字の中の人物として終わらせるのではなく、実際に生き、行動して、その時代を構成した人間として実感してほしい。作品や語り手を含めた昔の人たちを自分なりに解釈したり、その解釈をほかの解釈と比較検討したりして、「おもしろかった、楽しかった」と感じてほしい。そのような自分の気持ちに返りながら授業をすることができた。そして、五年生では、総まとめとして、「大鏡」を読んだ。生徒たちが自分で「大鏡」の登場人物に迫るような学習がしたいと思い、クラスでの読みとりの授業と、グループでの活動・個人の活動を組み合わせで行った実践を報告する。

二、授業の計画

日 時 一九九九年 二学期 古典(三単位)
対 象 広島大学附属福山中等学校

五年生(高校二年生) A組からE組 二〇〇名

単元目標 「大鏡」に登場する多彩な人間の姿を読みとり、
味わう。

単元計画

*は教科書(角川書店 高等学校古典I)にある章段であることを示す。

第一次 「大鏡」の各章段を読む。

① *安子の嫉妬」を読む：二時間

(一時間目は一九九九年の教育実習I Aで行った。)

② *兼通の執念」を読む：二時間

③ 「花山天皇の出家」を読む：二時間

④ *弓の競射」を読む：二時間

第二次 第一次の①から④に登場した人物から一人選び、読み深める。

①自分が読み深めようとする人物を選び、グループに分かれる。：一時間

②グループごとに、第一次に読んだものとは異なる章段(資料1)を読み、解説プリントを作り、その人物について話し合う。(資料2)：三時間

A 安 子：「貞観殿の尚侍登子」

B 村上天皇：「鶯宿梅」

C 兼 通：「関白は次第のままに」

D 兼 家：「法興院の怪」

E 花山天皇：「*花山院の風流」

E組では「朝餉の壺の乗馬」も

F 道 兼：「七日関白道兼急病」

G 道 長：「石山詣で」

H 伊 周：「双六」

③各自レポートを書く「私の考える ○○」

…課題学習期間中(二月)の課題 (資料3)

第三次 冊子を作り、解説プリントとレポートを読む。

(資料4~7)

三、反省と課題

授業ごとに生徒に順番に書かせている「授業記録」を見てみると、第一次の段階から、登場人物に興味を持ち、自分の第一印象や一面的な見方にとらわれず、また、歴史的評価のみに頼ることなく、彼らのありようにさまざまの考えをめぐらせて読んでいた生徒が多かった。

○最初は、粟田殿はこっそりと出家しようとする花山天皇を助け、何度も引き返そうとする優柔不断な天皇を諫める忠臣だと思っていたが、裏ではこんなとす黒い陰謀が渦巻いていたとは。私もだまされた。確かにこの話とはとても「あはれなる」話だ。そして、私が最も気になるのは、花山天皇のその後である。最初に出家しようと思つた原因の悩みと、信頼していた粟田殿に裏切られた悲しみを抱え、その後二十二年間悶々と暮らしたのでろうか。文を見ると、何となく気が弱そうな天皇なのでじゅうぶん考えられる。それとも、トラウマを克服して、のどかで楽しい余生を送つたのだらうか。私としては後者の方であつてほしいと思う。

(古谷智弘)

○粟田殿は悪知恵がはたらくなあと思った。しかも、花山天皇が

髪をそつてから、裏切るところが抜け目がない。でも、この時代では、これくらいずるがしこくないと、生きていけなかったというか、何とていうか。とりあえず、粟田殿は時代にあつた生き方をしていような気がします。だました粟田殿は、悪い人っぽく思われているようだけど、彼にも彼なりの理由があつてだましたのだらうし、だまされた花山天皇も考えがあさはかだつたのだと思います。

(石原史絵)

○「公と内々での伊周への態度を使い分けているなんて、道長はせこい！ずるい！延長戦で、伊周の前であんなプレッシャーのかかることを言うなんて、いかにもあからさまで、いやらしい！」そう思っていた。でも、よく読んでいくうちに、だんだんと、「やっぱり道長は偉大な人なのかもしれない」と思うようになった。伊周は育ちのせいとか、まわりの人たち(特にお父さん)に頼りきつていて、まだまだ自立できていないように見える。また、道長のちよつとした言葉に左右されるような弱さが丸見えだ。それに対して、道長には人間としての強さが感じられる。「この世をば我が世とぞ思ふ……」という歌も理解できる気がする。

(貝原加奈)

第二次では、それぞれのグループがすぐに渡したプリントを読み始めた。自分が選んだ人物の、別の側面が表れた文章を読みたいと思つていたのであろうか。プリントは本文のみのため、まずは音読を繰り返し、文節を確認するところから始まつた。辞書や文法書とくびつびきで読みとることとなり、みんなの知恵を出し合い口語

訳をしながら、活発な班活動が行われた。高校二年生だが、これまで口語訳を全文するというのを必ずしもさせてきていなかったの、辞書や文法書を活用できない生徒もいたが、今回のグループ活動で、口語訳という基本的な古文の学習の仕方を生徒同士で学びあうことができた。生徒自身の手による口語訳なので間違ひもあるが、品詞分解は訂正して印刷したが、口語訳はそのままとした。間違ひを指摘し合うこともよい学習になるのではないかと考え、その旨を伝えて冊子を配布した。

レポートを書く段階では課題学習期間中の個人作業となり、提出しなかった生徒も少なからずいた結果となったのは残念であった。また、レポートの冊子を作るために、一人が書く分量に限りがあり、人物を深く追求するまでには至らないレポートが多かった。比較して考察することで登場人物に迫ることができると考えて、二人ずつ対立させてとりあげたが、じゅうぶんに活用させることができなかったのも計画が不十分であった。しかし、提出されたレポートを読んでみると、『栄花物語』や『枕草子』・『蜻蛉日記』の内容と比較しながら人物像に迫ったり、彼らのその後について調べたりしていた。また、語り手の立場について考察をしたレポートもあった。授業者の方からは作品名も出していないのに、それぞれ選んだ人物に関連の古典作品を読んでいた生徒もいた。自ら設定した課題や問題意識があったために自然と古典の世界を自分でひろげたのだろう。

第三次の冊子を作ってレポートを読みあう段階では、生徒同士の

解釈を比較検討する時間をとれなかったことが残念である。古典を「どう読むか」「どう受け取るか」ということが人によって異なり、それらをつきあわせることによって、自分の考えが変化したりより明確になったりすることで、より登場人物に迫れるだろう。しかし、今回は日程の都合で時間がとれなかったこともあるし、生徒も私もそこまで気力が続かなかったという実感もある。最後は生徒に任せってしまった。長期（一月から二月）にわたる単元を実施する時の計画段階で、私の見通しが不十分だったということだ。

四、終わりに

五年生の終わりから六年生の最後の授業まで、『源氏物語』を読んだ。架空の人物ではあるが、光源氏の若い時代だけでなく、藤壺との関係を中心に彼の前半生をたどるようにとりあげた。

○源氏さん あなたは本当に藤壺さんが好きなんです。でも、もう少し彼女の気持ちも考えてあげなければいけないだろうと思います。子供が産まれたからといって、人目につかないようにとはしても、見に行くなよ。彼が彼女の置かれている立場をよく考えている場面がない。彼女が苦しんで苦しんでいることを、彼は、そこまで理解していない。彼女の事を好きなら苦しませないのも愛情表現の一つなのに。それにしても、いつの時代でも最後に苦しむのは女だと思った。男はなんて自分本位の気ままなやつが多いんだ。

〔紅葉賀〕 石谷光江

○何年も会えなくて、やっとのことで藤壺に会えた源氏。その気

持ちは想像するに遙かにあまりあります。紫の君という藤壺の替え玉までつくって、なお彼女を思い続けるのは、情熱的な響きを現代の我々にも感じさせてくれますね。

〔賢木〕 橋本悠樹

○生活にうるおいが出てきたためか、三十にもなってきたためか、源氏も大人になりました。御息所の遺言を心に留め、娘のことを真剣に藤壺と相談しているあたりは、昔の彼からは考えられません。過去の罪の意識をぬぐい去ろうとして、彼も必死なんでしょう。彼のキャラクターがここまでがらつと変わると、ちよつと困惑しますが、僕はこつちのキャラの方が好きです。そりゃあ源氏は昔のキャラだからこそよいのですが、昔の源氏はどうも好きになれなかつた。せつかく彼のキャラクターが合ってきたのに、もう二・三回で授業が終わってしまうのは、少し残念。

〔濔標〕 河田裕治

(二〇〇〇年度六年A組授業記録より)

六カ年一貫教育を実践している当校のおかげで、生徒が大きく変化する時期にずつとつきあうことができた。最後にとりあげた『源氏物語』では、授業の後によく、光源氏の至らなさや苦悩、登場人物たちの人間関係における悩みなどに共感したり、批判したりして語り合っていた。これは、古文であることの壁はあるが、登場人物を生き生きととらえ、『源氏物語』を楽しんで読んでいたということだろう。彼らの成長に、授業でどのように質することができるのかを問い続けながらの六年間であったが、彼らが卒業したこの機会にやってきたことを振り返りまとめてみた。迷いの中での一つの試み

を報告したのだが、ご指導をいただければ幸いである。

(広島大学附属福山中・高等学校)

資料①「フルーゴ別プリント例・村上天皇」

1999年度 5年生 古文 『大鏡』村上天皇

村上^{ミヤノ}の帝はた申すへきならず。「なつかしうなまめきたる方は、延^{ノボ}え
喜^{ヨロコ}には勝り申させたまへり」とこそ人申すめりしか。「われをば人はい
かが言ふなる」と人に問はせたまひけるに、「『ゆるになむおはします』
と世には申す」と羨しければ、「さてはほむるなんなり。王のきびしう
なりなば、世のいかが堪へむ」とこそ仰せられけれ。

いとをかしうあはれにはべりしことは、この天^{アマ}原^{ハラ}の御時に、清涼殿の
御前の榎^{エノ}の木の枯れたりしかば、もとめさせたまひしに、なにがしのぬ
しの、藏^{クラ}人^{ヒト}にていますかりし時、うけたまはりて、(藏人)「若き者は
え見知らじ。きむちもとめよ」どのたまひしかば、ひと京まかりありき
しかども、はべらざりしに、西^{ニシ}京^{キョウ}のそこそこなる家に、色濃く咲きたる

木の、榎^{エノ}体^{タテ}美^ミしきがはべりしを、堀^{ウツリ}どりしかば、塚のあるじの、「木に
これ結ひつけてもて参れ」と、言はせたまひしかば、あるやうこそはと
て、もて参りてさぶらひしを、「何ぞ」とて御覧すれば、女の手にて誓
きてはべりける、

勅^{ミコトノコト}なればいともかしこしうぐひすの宿はと問ははいかごとたへむ

とありけるに、あやしく思し召して、「何者の家ぞ」と尋ねさせたまひ
ければ、實^{マコト}之^ノのぬしのみむすめ^メの住む所なりけり。「遺恨^{イタガハシ}のわざをもし
たりけるかな」とて、あまえおはしましける。兼繼^{カネツグ}今^{イマ}生^{ナマ}の辱^{ハジメ}号^{ナリ}は、これ
やはべりけむ。さるは、思ふやうなる木もてまゐりたりとて、衣^イかづけ
られたりしも幸^{サイ}くなりにき、とて(語り手は)こまやかに笑ふ。

(道長・雑々物語)

資料③

1998年度 五年生 古文『天鏡』 班による解説プリント・個人レポート 作成の手引き

[五年 組 理]

解説プリント

1. 内容

- ① 班別り上げた人物名と班のメンバーの名前・各人の役割。
- ② 難しい箇所を品詞分析・文法的説明
- ③ 口訳(直訳)を基本にする。容易な意味はタメ。必要な語句の挿入など(わかりやすく)
- ④ 口語の意味
- ⑤ 句読点の意味
- ⑥ 解説・解釈・説明
- ⑦ その他、その文章を読み、理解するのに必要な事柄

2. 形式

- ① B・縦書き、4枚以内
- ② 字の大きさをA4用紙に準じて、図表やイラストも加えて、見やすく読みやすいプリントにしてください。

3. その他、原稿を書くときの注意

- ① 手書きの場合は、黒ペンで書きましょう。ブルー、ピンクを使ってください。
- ② 班のメンバーで相談して、役割分担をしてください。それぞれの役割を決めてください。
- ③ 班内は、各人が輪で書き持ち回り、切り貼りしてもかまいません。余分なプリント用原稿が必要な班は、後者が国語科で取りに来てください。
- ④ 水色の三方の線と、赤線とで囲まれた範囲に収めてください。どちらを上にしてもかまいません。
- ⑤ 完成 月 () 日 () 時間目の古曲の授業の終了時 に提出しましょう。

個人レポート『私が考える○○』

1. 題は自由につけてください。もちろん『私が考える○○』でもいいです。

2. 書くこと

- ① 題 ② 自分の名前

③ 本文

- ・ 課題#自分がその人物について考えたい点、明らかになったこと、選んだ理由。
- ・ 課題#設定の理由#なぜその課題にしたのか。
- ・ 本論#「学期に授業で読んだ文章とグループ学習で読んだ文章とをきまわって」グループ学習で話したことで、「調べて分かったことから」など、理由・根拠を明らかにする。
- ・ 結論#課題に対する自分の考えを述べる。

④ 参考文献(あれば)

- ⑤ 図表・イラスト(必要なら)

3. 注意してほしいこと

- ① 黒ペンで書いてください。縦書きかして印刷しにくいのでタテ、ブルーやピンクでもよいです。汚さないように。
- ② 分量は、B5 1枚、縦書き、できれば縦横で、水色の三方の線と、赤い線とで囲まれた範囲に収めてください。どちらを上にしてもかまいません。
- ③ あまり小さな字にしないでください(10、5ポイント以上)。印刷してみんなに読んでもらうのですから。特に手書きの場合は、小さくても水色の三方の線に収まるくらいの字にしてください。
- ④ 提出2月15日(火)午後4時まで。

(C)組 村上天皇フルーラ 3(ベーシ)

村上の帝はた申すべきならず。一なつかしうなまめきたる方は、延え

誓には勝り申させたまへり^①と^②人申すめりしが^③。一われをば人はい

かが言ふなる^④と人に問はせたまひけるに、^⑤「^⑥わが^⑦おほしき^⑧王^⑨の^⑩きびし^⑪う^⑫」

と世には申す^⑬と^⑭奏しければ、^⑮「さては^⑯は^⑰は^⑱むる^⑲なん^⑳なり^㉑」

なり^㉒な^㉓ば、^㉔世の^㉕人^㉖い^㉗か^㉘が^㉙堪^㉚へ^㉛む^㉜と^㉝と^㉞申^㉟せ^㊱ら^㊲れ^㊳け^㊴れ^㊵。

いとをかしうあはれにはべりしことは、この天降の御時に、清波殿の

御前の梅の木の始れたりしかば、^①「^②も^③と^④め^⑤き^⑥せ^⑦た^⑧ま^⑨ひ^⑩し^⑪に^⑫、^⑬な^⑭に^⑮が^⑯し^⑰の^⑱ぬ^⑲」

し^㉑の^㉒奏^㉓に^㉔て^㉕い^㉖ま^㉗す^㉘か^㉙り^㉚し^㉛時^㉜、^㉝う^㉞け^㉟た^㊱ま^㊲は^㊳り^㊴て、^㊵一^㊶人^㊷一^㊸若^㊹き^㊺者^㊻は

文^㊼見^㊽知^㊾ら^㊿じ[㉀]。き[㉁]わ[㉂]ら[㉃]も[㉄]と[㉅]め[㉆]よ[㉇]と^㉈の^㉉た^㊱ま^㊲ひ^㊳し^㊴か^㊵ば、^㊶ひ^㊷と^㊸京^㊹ま^㊺か^㊻り^㊼あ^㊽り^㊾き^㊿。

木^㉟の^㊱構^㊲体^㊳美^㊴し^㊵き^㊶が^㊷は^㊸べ^㊹り^㊺し^㊻を、^㊼堀^㊽ど^㊾り^㊿し[㉀]か[㉁]ば、[㉂]家[㉃]の[㉄]あ[㉅]る[㉆]じ[㉇]の^㉈、^㉉一^㊱木^㊲に^㊳。

これ結ひつけてもて参れと、言はせたまひしかば、^①「^②あ^③る^④や^⑤う^⑥と^⑦」

て、もて参りて^⑧さ^⑨ぶ^⑩ら^⑪ひ^⑫し^⑬を、^⑭「^⑮何^⑯ぞ^⑰」とて御覽すれば、女の手にて^⑱花^⑲

きてはべりける、
物^㉑な^㉒れ^㉓ば^㉔い^㉕と^㉖も^㉗し^㉘う^㉙ぐ^㉚ひ^㉛す^㉜の^㉝酒^㉞は^㉟と^㊱問^㊲は^㊳い^㊴か^㊵が^㊶こ^㊷た^㊸と^㊹。

とありけるに、あ^①やし^②く^③思^④し^⑤召^⑥して、^⑦一^⑧何^⑨者^⑩の^⑪家^⑫ぞ^⑬と^⑭尋^⑮ね^⑯さ^⑰せ^⑱たま^㉑ひ

ければ、真^㉒之^㉓の^㉔ぬ^㉕し^㉖の^㉗み^㉘む^㉙す^㉚め^㉛の^㉜住^㉝む^㉞所^㉟な^㊱り^㊲け^㊳り。

た^㊴り^㊵け^㊶る^㊷か^㊸な^㊹と^㊺て、^㊻あ^㊼ま^㊽え^㊾お^㊿は[㉀]し[㉁]ま[㉂]し[㉃]け[㉄]る。

「[㉅]は[㉆]べ[㉇]り^㉈け^㉉れ^㊱。」と^㊲思^㊳ふ^㊴や^㊵う^㊶なる^㊷木^㊸も^㊹て^㊺ま^㊻め^㊼り^㊽た^㊾り^㊿と[㉀]て、[㉁]衣[㉂]か[㉃]つ[㉄]け[㉅]。

「[㉆]ら[㉇]れ^㉈た^㉉り^㊱。」も^㊲幸^㊳く^㊴な^㊵り^㊶に^㊷き^㊸と^㊹て^㊺「^㊻語^㊼り^㊽手^㊾は^㊿」と[㉀]ま[㉁]や[㉂]か[㉃]に[㉄]笑[㉅]ふ。

(道長・雑々物語)

